

20代からの夢を叶え 定年退職後、イギリスの大学院に留学

元春日井市立中学校教諭

梅村建次さん (64 歳)

2010年3月定年退職

【うめむら けんじ】1950年、愛知県名古屋市出身。1975年、静岡大学教育学部卒業後、春日井市立中学校理科教諭として勤務。2011年8月渡英し、エセックス大学大学院で2012年9月まで学ぶ。専攻は英語教授法。2012年11月修士号取得。現在は英語講師、エッセイスト。



——梅村さんは定年後にイギリスにあるエセックス大学大学院に留学されていますが、留学したいと思われたのはいつで、その理由は何だったのですか。

定年の3年ほど前からです。私はロックやポップミュージックが好きで、これらの音楽が各国のビジネスに与えた影響や民族による歌詞の捉え方などを研究したいと思い、問い合わせたのが、イギリスにあるリバプール・ホープ大学です。新聞記事でビートルズを学術的に研究していると知って直接コンタクトを取るうちに、ロック以外の分野にも関心が広がっていきました。例えば、景観学、老人学、園芸療法など日本には無い講座がとて新鮮に映りました。調べる中で英語を専門的に学べる環境が充実しているということと、TESOL (Teaching English To Speakers of Other Languages…英語教授法)を勉強したいと強く考えるようになりました。

——留学のために、どのような準備を、どのくらいの期間されたのですか

留学をおぼろげに考えていた20代後半から、英会話学校に通い出しました。ただ、学校の部活動で土・日もほとんど使ってしまったて、平日も部活動を終えてからのレッスンは大変でした。部活のハンドボールは面白くてのめり込む毎日でしたが、年を取ったら何が残るのか、部活だけではいけないと自分を叱咤激励して、30年近くも英会話学校や大学のエクステンション・プログラムでほと

んど切れ目無く勉強を続けていました。定年前には通訳学校やセミ・プライベートル・レッスンを受けた他、休みを利用して、イギリスやニュージーランドに短期留学したこともありました。

——大学院にはどのくらいの学生が？

世界130カ国、約4000名の大学院生がいました。20代半ばから30代がほとんどで、40代では珍しく、50代となるとほとんど見かけません。私のような60代は例が無かったようで、キャンパスではスタッフや他の学生たちにはかなり知られた存在でした。

リタイア後はのんびり過ごすのが一般的なイギリス人にとって、リタイア後まで大学院で勉強することは驚きであると同時に、そのチャレンジ精神に対しては評価してもらえたようです。

——大学院では何を勉強されたのですか。

インターナショナル・アカデミーという学部でTESOLつまり英語を教える方法論の研究をしていました。イギリスの大学院は1年間しかないもので、ほとんど休む間もないくらい多忙を極めましたね。

——授業で最も大変だったことは？

やはり、総合的な英語力です。聞く力と発信する力は、どれだけ頑張ってもネイティブなみとはいきません。これは他の学生たちも感じていたと思います。

それに加えて、他の学生と違って、英語教育論や方法論の文献にこれまでの蓄積が無かったので苦勞しました。ですから、毎日

●梅村さんの1日のスケジュール

7:00	起床
7:30	弁当作り
8:30	犬の散歩
9:30	喫茶店へ
10:30	執筆か英語講座
12:00	昼食
13:00	執筆、読書
15:00	買い物
17:00	夕食作り
18:30	夕食
20:00	スカイプで英語のトーク
21:00	執筆
24:00	就寝

●1週間のスケジュール

日曜日	森林公園を散歩
月曜日	本の執筆
火曜日	英語講座
水曜日	執筆
木曜日	英語講座
金曜日	近隣の町巡り(中山道)
土曜日	執筆



留学中に訪れたバイブリーの町



3週間ホームステイしたイギリス人の家族と一緒に

あつて広々していたので、息子が訪ねて来た時にも十分のスペースがありました。

——休日はどう過ごされていたのですか。

イギリスの大学院生は、基本的に土・日以外休みを取れません。というのも、小論文の提出が目白押しで、それに追われてしまうからです。夏休みも、修士論文の最後の仕上げの真っ最中です。私は土・日の片方は勉強し、も

のように図書館に通い関連用語を調べたり、著名な著者の文献を読みあさりしました。

——留学中は、どんなところに住まっていたのですか？

初めの1カ月半は、大学の敷地内にある主に大学院生用として使われている寮に住んでいました。その後、3週間はイギリスの家庭にホームステイし、11カ月はフラットと呼ばれる民間のアパートに住みました。フラットの家賃はすごく高かったですが、2部屋

う片方はパブで飲んだり、町を歩いてウインドウ・ショッピングをして気分転換していました。

——留学中の費用はどのくらいでしたか。

トータル500万円ほどで、その内訳は学費が150万円、住まいとなる寮やフラットの代金が100万円、食費・光熱費・インターネット代などが150万円、航空券3往復分が50万円、留学中の旅行代金が30万円などです。

——留学して一番よかったことは？

自分のまだ知らない能力を思い切り確認できたことです。留学するまで40回ほど海外旅行をしましたが、人間としてどの国の出身者とも対等な関係を築けたことも大きな財産となりました。

——帰国後は、どのように過ごされているのですか？

帰国後半年間は、毎日息子の大学受験の英語のサポートをしていました。その後は、カルチャースクールで大人向けの英語講座を持つています。さらに、昨年8月からは本の執筆を始め、近いうちに出版社と正式契約する予定です。

——今後やりたいことはありますか？

大人向けの英語講座と子供向けの科学講座を広げていきたいと考えています。その一方、執筆した本が出版された後は、その本の英訳にとりかかり、できれば来年には英語版を出したいと思っています。

——最後に、現役の地方公務員の方にメ



帰国後は、大人向けの英語講座を持っている

ッセージをお願いします。

公務員として大きな組織に属していると、どうしても自分らしきを見失いがちです。自分なりのもの見方を持つて、時には大胆に自分自身の人生を切り開いていってくだささい。それには、仕事以外の楽しみを幾つか用意して、いつでもそのカードが切れるくらいに自身を充実させておくことが肝要だと思います。

これに加えて、多方面な事象に関心を持ち続けることは、自身の脳の劣化を緩やかなものにするのに極めて有効だと思います。

——ありがとうございました。